

地域と連携した金沢港の賑わい創出について

宮川 史也¹・南 靖彦¹

¹金沢港湾・空港整備事務所 企画調整課 (〒920-0331 石川県金沢市大野町4丁目2の1)

開港50周年を迎えた金沢港では、昨年、クルーズターミナルの完成を契機に、地元まちづくり団体等が港の賑わい創出に向け、コロナ禍でのイベント開催や冬期の周辺観光地への集客等の課題について検討を進めているところである。このような中、直轄事務所では、港湾事業等の広報活動の一環として、地元まちづくり団体主催のイベント「金沢みなとのてんらんかい」に参画した。本稿では、地元まちづくり団体等と連携して行った金沢港の魅力発信や知名度向上等の取組内容について報告する。

キーワード 地域連携、賑わい創出

1. はじめに（金沢港が賑わい拠点を目指す背景）

(1) 金沢港の歴史について

金沢港は、江戸時代に北前船の寄港地として、加賀藩の海の玄関口として栄えた歴史を持つ。1963年（昭和38年）に起こった三八豪雪を契機に現在の金沢港の整備が進められ、1970年（昭和45年）に関税法による開港となり、2020年（令和2年）には開港50周年の節目の年を迎えた。

(2) 金沢港が賑わい拠点を目指す背景について

金沢港は物流拠点だけでなく、賑わいの拠点としても重要な役割を持っている。その要因としては以下の①～④が挙げられる。

- ① 金沢港へのクルーズ船の寄港数の増加
- ② 無量寺岸壁再整備完了と金沢港クルーズターミナルの完成
- ③ 石川県における「分区」制度の導入
- ④ 金沢港周辺の観光スポット

まず一つ目は金沢港へのクルーズ船の寄港数の増加である。平成27年の北陸新幹線開業以降、「レール&クルーズ」が可能となり、寄港数が更に増大している。2019年には年間51回の寄港数を記録し、日本海側でもトップクラスの寄港数を誇っている。クルーズ船寄港時には自治体や地元団体が歓迎イベントやお見送りイベントを実施しており、クルーズ旅客だけでなく、地元の方々も参加し、一つの賑わい空間が形成されている。

次に2020年3月に直轄事業で整備した無量寺岸壁（－10m）の再整備と石川県が整備した金沢港クルーズターミナルの完成である。これらにより、クルーズ船の受入環境が改善し、更なるクルーズ船の寄港数増加が期待さ

れている。金沢港クルーズターミナルはクルーズ船の受入拠点として整備されており、クルーズ船が寄港しない時はイベントの会場としても活用が可能である。当施設は開業から約1年で約70万人の来場者を記録し、金沢港の新たな人流拠点となっている。

次に「分区」制度の導入である。石川県は2021年4月に貨物、クルーズ、そして賑わいを加えた3つの機能を最大限発揮するために、港湾法に基づく「分区」制度を導入した。これにより、柔軟な土地利用が可能となり、更なる賑わい創出に寄与することが期待されている。

最後は金沢港周辺の観光スポットである。金沢港の背後地には歴史的・文化的なまちなみが残っている「金石・大野地区」が存在している。この地区は、江戸時代に北前船の寄港地として栄えた歴史を持っていることや醤油や味噌の生産地としても知られており、昔ながらのまちなみが色濃く残っている。金沢市はこの「金石・大野地区」を市の条例に基づく「こまちなみ保存地区」として、金沢の歴史を受け継ぐ貴重な遺産として保存に努めている。また金沢港周辺には「金石・大野地区」の他に以下の図-1で示すような、「金沢港いきいき魚市」や「金沢港大野からくり記念館」などの観光スポットが存在している。

金沢港は上記に示すとおり、賑わいの拠点としての役割を担っている。2020年には開港50周年を迎える節目の年を迎えたことや、「金沢港クルーズターミナル」といった新たな人流拠点が完成したことを契機に自治体（県、市）や地元団体らは金沢港周辺の賑わいに対する関心を強めているところである。



図-1 金沢港周辺の賑わい施設

2. 金沢港の賑わい創出における課題について

上記のとおり、金沢港は賑わいの拠点としての役割を担っているが、一方で以下の①～③に示す課題が残っている。

- ① 冬期における来訪者の減少。
- ② 金沢港周辺の賑わい施設の知名度不足。
- ③ 新型コロナ禍における賑わい創出。

一つ目の課題は冬期における来訪者の減少である。冬期にはクルーズ船がシーズンオフになることや日本海側特有の荒天により、クルーズ船の寄港が著しく減少する。クルーズ船の寄港実績によると、過去5年間（H27年～H31年）における冬期（12月～2月）の寄港実績は1隻のみであり、冬期はクルーズ船の寄港が極端に少ないことが分かる。また金沢港周辺では定期的なイベントが開催されており、賑わいの創出に寄与している。しかし冬期にはこのイベントの開催が少なくなり、大規模なイベントも開催されないため、他の時期に比べ、イベントによる来訪者が少ないのが現状である。

二つ目は金沢港周辺の賑わい施設の知名度不足である。金沢港周辺には図-1で示した魅力ある観光スポットが存在しているが、これらのスポットは金沢を代表する観光スポットである「兼六園」や「ひがし茶屋街」と比べると、知名度が低い。そのため、金沢港クルーズターミナルという人流拠点から、金沢港の周辺スポットへの集客が課題の一つになっている。こうしたなか、地元団体や県、市はイベントの開催や観光スポットを紹介するパンフレットなどを作成し、知名度向上に向けて取り組んでいるところである。

三つ目は新型コロナウイルス（以下、新型コロナ）が感染拡大するなかでの賑わい創出である。開港50周年の節目の年である2020年は、金沢港クルーズターミナルの完成を契機にクルーズ船の寄港数増大やイベントの開催による賑わい創出が期待されていた。しかし新型コロナの感染拡大により、当初予定されていたクルーズ船は全て中止となるほか、金沢港の周辺で開催予定であったイベントは軒並み中止となり、金沢港の賑わい創出は困難

な状況となった。

3. 金沢港での賑わい創出に向けた対策

(1) 金沢みなとのてんらんかいの開催経緯について

上記のように金沢港の賑わい創出には課題が残っており、この課題解決に向けて、地元まちづくり団体だけでなく、県、市の自治体、直轄事務所が連携して取り組んでいるところである。直轄事務所としても国土交通省港湾局が取り組んでいる「みなと」を核としたまちづくりを推進するため、地元まちづくり団体が主催する港を中心としたイベントに参画し、港の概要や直轄事業等の広報活動を行っている。

こうしたなか、地元まちづくり団体である「金沢港おもてなしクラブ」は定期的に金沢港周辺の賑わい創出にむけた勉強会を行うほか、実際に金沢港周辺を散策し、新たな課題や魅力を発見するまちあるき勉強会等を行い、金沢港の賑わい創出に関する課題解決に向けた取組を行ってきた。このような取組を重ねるなかで、当団体は金沢港の賑わい創出の課題解決と知名度向上、魅力発信につながるイベントとして「金沢みなとのてんらんかい」を企画した。当イベントは地元小学生を対象に金沢港の魅力スポットや未来の金沢港の姿をスケッチしてもらい、その作品を金沢港クルーズターミナルに展示することで、金沢港の魅力発信や知名度向上につなげるイベントである。また開催時期を冬期（2月下旬）にすることで冬期における賑わい創出の課題解決につなげるのが狙いである。

直轄事務所は主催者である「金沢港おもてなしクラブ」から後援依頼を受け、「みなと」を核としたまちづくりを推進していることを背景にこれを承諾した。また当イベントの企画や運営の補助を行うとともに、イベント当日には「国土交通省パネル展」と題し、港の概要や直轄事業について学べるブースを設置し、当イベントに全面的に参画した。

表-1 イベント概要と内容

イベント名	金沢みなとのてんらんかい
開催期間	令和3年2月27日(土)～令和3年3月4日(木)
会場	金沢港クルーズターミナル
主催	金沢港おもてなしクラブ
後援	金沢港湾・空港整備事務所ほか10団体
募集テーマ	① 「あなたの大好きな金沢港」 ② 「未来の金沢港」

(2) 地元と連携したイベント開催について

当イベントは主催者と直轄事務所、地元団体等が連携しながら準備を進めた。イベントのターゲットを小学生とし、家族単位で来場いただけるようなイベントとし、集客力向上を計った。また、市や地元団体と連携するこ

とで、イベント内容を「スケッチ作品展示」だけではなく、以下の(a)～(e)示す内容も同時開催とし、イベント全体で金沢港の歴史や現在の姿のほか、港湾整備、海の環境問題などの理解を深めてもらえるようなイベントとなるように工夫した。

- (a) 「スケッチ作品展示」(主催：金沢港おもてなしクラブ)
- (b) 「国土交通省パネル展」(主催：直轄事務所)
- (c) 「北前船、金石・大野地区パネル展」(主催：直轄事務所、協力：金沢市)
- (d) 「港に関するワークショップ」(主催：石川県港湾漁港建設協会)
- (e) 「海に関するクイズ大会、アニメ上映」(主催：石川テレビ、協力：海と日本のプロジェクトin石川実行委員会)

イベントの開催前には以下の図-2に示すチラシを作成し、金沢港クルーズターミナル内で配布・掲示や直轄事務所HP等で公開し、イベントの広報活動を行った。以下に当イベントで取り組んだ内容について具体的に述べる。



図-2 広告用のチラシ

(a) 「スケッチ作品展示」について

まず「スケッチ作品展示」の取組を紹介する。このイベントは小学生を対象に「あなたの大好きな金沢港」、「未来の金沢港」をテーマにスケッチ作品を募集し、これを金沢港クルーズターミナルに展示することで、知名度向上や魅力発信につなげるのが目的である。スケッチ作品の募集の際には地元小学校に声がけを行い、より多くのスケッチ作品が集まるよう工夫した。声がけを行った小学校の中には授業の題材として、当イベントを活用し、学校を挙げてご参加いただいた小学校も多数あった。その結果、計819作品に及ぶ作品が集まり、多くの作品を展示することが可能となった。また27日には優秀な作品を表彰する表彰式も開催した。受賞者への記念品や当日の参加賞も用意し、イベントの集客に努めた。また記念品等の賞品は地元商店街の商品を活用し、地元名産品の知名度向上につながる仕掛けとした。以上のような工夫のおかげもあり、イベント当日には多くの家族連れが来場し、子供達の作品を鑑賞する姿で会場は賑わった。



写真-1 スケッチ作品展示のようす

(b) 「国土交通省パネル展」について

次に「国土交通省パネル展」の取組について紹介する。このパネル展は直轄事務所が金沢港の歴史や直轄事業等に関するパネルを展示することで、来場者に港の役割や港湾整備の重要性を理解していただくことを目的として実施した。実際には、航空写真から金沢港の歴史を学べるパネルや現在の金沢港の概要や直轄事業のほか、「みなとオアシス」の紹介などの約30枚ものパネルを展示した。上記以外にも、子ども達でも楽しみながら、港について学べるような仕組みとした。子ども向けの港の役割について学べるパネルのほか、直轄事業として実施している「大野地区西防波堤」や2020年3月に再整備が完了した「無量寺岸壁」の模型展示や3Dプリンターで作成した港湾整備に関する模型の色塗りコーナーも実施した。また、金沢港周辺の賑わい創出を図るための課題把握や周辺スポットの知名度調査を行うために、来場者にアンケート調査も同時に実施し、金沢港の賑わいに関する地元の方々の声を直接聞き、今後の賑わい創出につながる取組も実施した。



写真-2 直轄事業や「みなとオアシス」について説明



写真-3 模型や3Dスキャナー用いて説明

(c) 「北前船、金石・大野地区パネル展」について

次に「北前船、金石・大野地区パネル展」の取組について紹介する。先述したとおり、金沢港周辺の「金石・大野地区」には歴史的・文化的なまちなみが残っており、観光スポットとなっているが、知名度の向上という課題

が残っている。この課題を解決する取組として「金沢みなとのてんらんかい」と同日に北前船や金石・大野を紹介するパネルを展示し、知名度向上につながるような取組を行った。展示したパネルは「金石・大野地区」の賑わい創出や知名度向上に努めている金沢市のご協力をいただいた。実際に寄港していた北前船が描かれた絵馬のレプリカ（金沢市所蔵文化財）や「金石・大野地区」の魅力スポットをのマップの展示を行い、昔の金沢港の歴史を学びながら、現在の金沢港周辺の魅力スポットも発見できるような仕組みとした。



写真4 北前船や「金石・大野」に関するパネル展示

(d) 「港に関するワークショップ、クイズ大会」について

次に港や海に関するワークショップの取組について紹介する。「金沢みなとのてんらんかい」の後援、協力団体である「石川県港湾漁港建設協会」はミニサイズの消波ブロックを作成できるワークショップを開催した。実際に防波堤に設置している消波ブロックの作成体験を通して、港湾事業について理解を深めてもらうことが目的である。また同じく後援、協力団体である「石川テレビ」、「海と日本のプロジェクトin石川実行委員会」は海や海の環境問題を題材とした小学生向けのクイズ大会やアニメ上映を同時開催した。来場した子ども達に海の環境問題についてイベントを通して学んでもらうことが目的である。両イベントを通して多くの家族連れで賑わい、体験を通して、楽しみながら港や海について学んでいただくことが出来た。

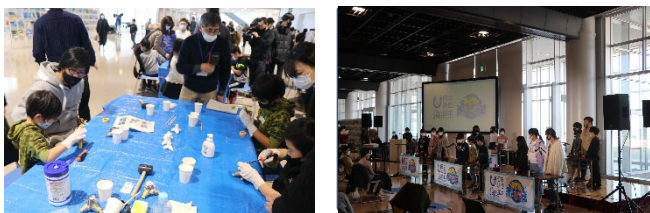


写真5 当日の様子（左：ワークショップ、右：クイズ大会）

(3) 「金沢みなとのてんらんかい」の効果について

上記の通り開催した「金沢みなとのてんらんかい」は実施期間（2月27日～3月4日）中に約1万人が来場し、冬期の金沢港の賑わい創出に寄与することが出来た。来場者の方からは「金沢港周辺のいろいろなスポットのスケ

ッチが見れて楽しかった」、「金沢港の歴史や現在行っている事業について分かりやすく学べた」などの好評の声をいただいた。またご協力いただいた小学校からは「応募した作品を全て展示してくれてありがたい」等の感謝の声もいただいた。また、27日の開催時の様子は地元ニュース番組や新聞紙で取り上げられ、金沢港でのイベント開催状況の認知度向上や誘客につながったと考えられる。

また当イベントは主催者の「金沢港おもてなしクラブ」だけでなく自治体や地元団体とつながり、連携して開催することができた。自治体や地元団体と連携することでイベント規模を大きくして、開催することができ、イベントの来場者増に寄与したと考えられる。今回、構築できた関係性をこのイベントだけで終わらせるのではなく、今後もイベント内容を工夫して、継続していくことが重要だと考える。今年度は金沢港へのクルーズ船の寄港も再開しており、クルーズ船の寄港イベント時には今回のつながりを活用し、地元と一体なった歓迎イベントなどを開催したいと考えている。

4. 金沢港周辺の賑わい創出に関する今後の課題について

「金沢みなとのてんらんかい」を開催して感じた今後の課題について述べる。

一つ目はイベントの告知方法である。今回は先述したとおり、図-2で示すチラシを作成し、広報活動を行ったが、近隣地区のみしか掲載・配布できなかった。今後は広報の対象地区をもっと広げ、石川県内だけでなく、県外からも来場していただけるような広報活動を行ってきたい。そのためにはチラシの配布箇所を広げるほかに、SNS等を用いた広報活動が効果的であると考えられる。

二つ目は冬期における恒例イベントの開催である。「金沢みなとのてんらんかい」は今回、初開催であったが約1万人の方にご来場いただけた。このような集客イベントを冬期にも積極的に開催していくことが必要だと考える。そして、冬期に一つ恒例イベントができることで、安定した集客が見込まれ、冬期の賑わい創出の課題解決につながっていくだろう。そのためには地元だけに任せるのではなく、自治体と地元団体だけでなく国も連携して取組んでいくことが重要だと考える。直轄事務所としても、賑わい創出に参画していくことで、直轄事業の広報活動にもつながり、「みなと」を核としたまちづくりに貢献できると考えられる。

またイベント当日に直轄事務所で実施したアンケートにより、金沢港の賑わい創出について、地元の方々が思っている課題を発見することができた。以下の図-3は「金沢港周辺で不便な点はあるか？」という問いの集計結果である。

金沢港周辺で不便な点はあるか？

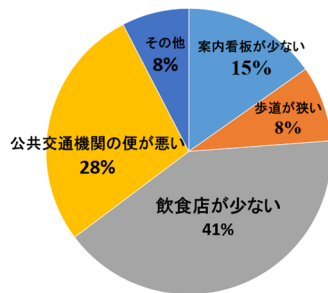


図-3 アンケート結果

この結果をみると、「飲食店が少ない」が最多の約41%、次点で「公共交通機関の便が悪い」約28%、「案内看板が少ない」約15%と続いた。これらの課題に対しては先述した石川県が導入した「分区」制度により、クルーズ港区や商港区では飲食店の設置が可能となるなど、上記の課題解決の取組として期待されている。また公共交通機関や案内看板についても、金沢港周辺の回遊率を向上させるためには重要であるため、今後、地元団体と自治体とが連携して取組み、直轄事務所もこの取組に参画していく事が重要だと考える。

5. まとめ

冬期の賑わい創出や金沢周辺の知名度向上を目的とした「金沢みなとのてらんかい」は「金沢港おもてなしクラブ」が主催者となり、自治体や直轄事務所と連携して開催された。当イベントは約1万人の来場者を記録し、冬期の賑わい創出と金沢港周辺の知名度向上や直轄事業の広報活動に十分に寄与できたと考えられる。今後も集客力のあるイベントを継続して開催するためには地元団体だけでなく自治体および直轄事務所においても参画し、広報活動等を通して、支援していくことも重要であると考ええる。

6. 謝辞

「金沢みなとのてらんかい」の開催にあたり、後援、ご協力いただいた、金沢みなと懇話会、石川県港湾漁港建設協会、北國新聞社、石川テレビ、海と日本のプロジェクトin石川実行委員会、各町会連合会の皆様に、我々からも深く感謝申し上げます。また「国土交通省パネル展」の開催において、パネル提供等のご協力をいただいた金沢市の皆様にも深く感謝申し上げます。